

肥満とは何か？

小澤 芳

国立病院機構 栃木医療センター 内科



白 状するが、この特集を組むまでは本当に肥満診療が苦手であった。

外来でどんどん血糖降下薬を追加しても血糖が下らず、体重さえ減ればきつと薬も減らせるの

に…と思い、患者と一生懸命取り組んではみるものの、なかなか減量にはつながらず、つい陰性感情をもってしまっていたことがあった。そんな感情があっても診療には何もいいことがないと押し殺して、「患者さん自身の身体のことだから、仕方がないよね」と減量指導を避けてしまうこともあった。レジデントから肥満症患者について相談されても、あまりプラクティカルなことは言えず、もやもやした気持ちをずっともっていた。

本特集は、「肥満」との向き合い方に強い苦手意識をもっている、そんな私自身が一番読みたいような内容を目指した。自身の減量指導について「このままでいいんだろうか？」と疑問をもっている方、「もう減量指導なんて無理だ」と諦めてしまっていた方が、少しでもまた向き合ってみようと思えるように、なるべくプラクティカルな内容を、職種を問わずさまざまなエキスパートの先生方にご執筆をお願いした。

また、現代社会において肥満は、生物医学的側面からだけではとらえられない複雑な側面も持つ。多様な価値観のなかで、今改めて「肥満とは何か」を考える機会になればと思い、人類学・倫理学のエキスパートの先生方にも執筆していただいた (p.820・825)。

本特集が多くの方に読まれ、1人でも多くの医療者が「肥満」ともう一度向き合おうと立ち上がってくれることを願うばかりである。



矢吹 拓

国立病院機構 栃木医療センター 内科



WHO (世界保健機関) はBMIが30を超えた場合を「肥満」、25を超えた場合を「太りすぎ」と定義した。少しデータは古いが2016年には、18歳以上の成人の

うち19億人以上が「太りすぎ」、6億5000万人以上が「肥満」とされている。世界人口約80億人の3割強が該当する、全世界的問題が「肥満」なのである。

…という流れで、「肥満診療に取り組もう！」というスローガンに基づき、シンプルに肥満を“病気”と考えることに違和感は少ないように思う。巷には、ダイエットに関連する広告や書籍、サービスに溢れ、「肥満はよくない」「肥満を予防・治療しよう」というステレオタイプな情報が一般的だろう。「健康」というアウトカムに基づいた時、「肥満」はたしかに大きな課題と言える。

一方で、「肥満」を取り巻く状況は、それほど単純ではない。背景因子としての心理・社会的要因 (p.805・820・845) やルッキズム (p.820・825) などの文化的な問題、さらにはスティグマ (p.825・802・807) などの倫理的問題など、必ずしも「肥満＝治療すべき課題」として医療的解決を目指すことだけが正しいとは言えないのである。

本特集では、「肥満」について“全方位的”に考えるため、さまざまな視点で医療者および医療者以外の諸先生方にご執筆いただいた。それぞれの原稿を拝読しながら、私自身が「肥満」についてこれほどさまざまな角度からスポットを当てて考えたことはなかったかと、改めて反省しきりである。読者のみなさまにとって、1つでも新たな気づきがあればと願っている。

